

フランスのある演出家たちは、パントマイムというものは、脚本のふくんでいる効果を補うための、いろんな手段のなかの一つである、というふうに見ていました。ですから、芝居の合間に入れるものとしたのです。かれらが願ったことは、ひと晩、ひとつの出し物に、なんとか演劇の効果手段すべてをつぎこんで、印象を豊かにしてやろうということでした。それを全体演劇(**totales Theater**)と呼んだのである。そんなわけですから、全体演劇にふれるのは、どうも危険だと思いますね。ある芸術のことを話すのに、それが全体か半分かなんてことがどうして言えましょう？ヴァン・ゴッホの絵を見る、ベートーヴェンの交響曲をきく、バッハの遁走曲をきく、どの場合も私はおなじように感動しています。自然のなかに入っていくとき、自然がもっと美しく見えるようにといて、蓄音機を持っていくなんてこと、私はしませんね。

P.48 「パントマイム芸術」 1971年第1刷発行 てすびす双書63 未来社

(原書1956年 Herbert Jhering・Marcel Marceau "Die Weltkunst der Pantomime" Aufbau-Verlag Berlin)

